



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

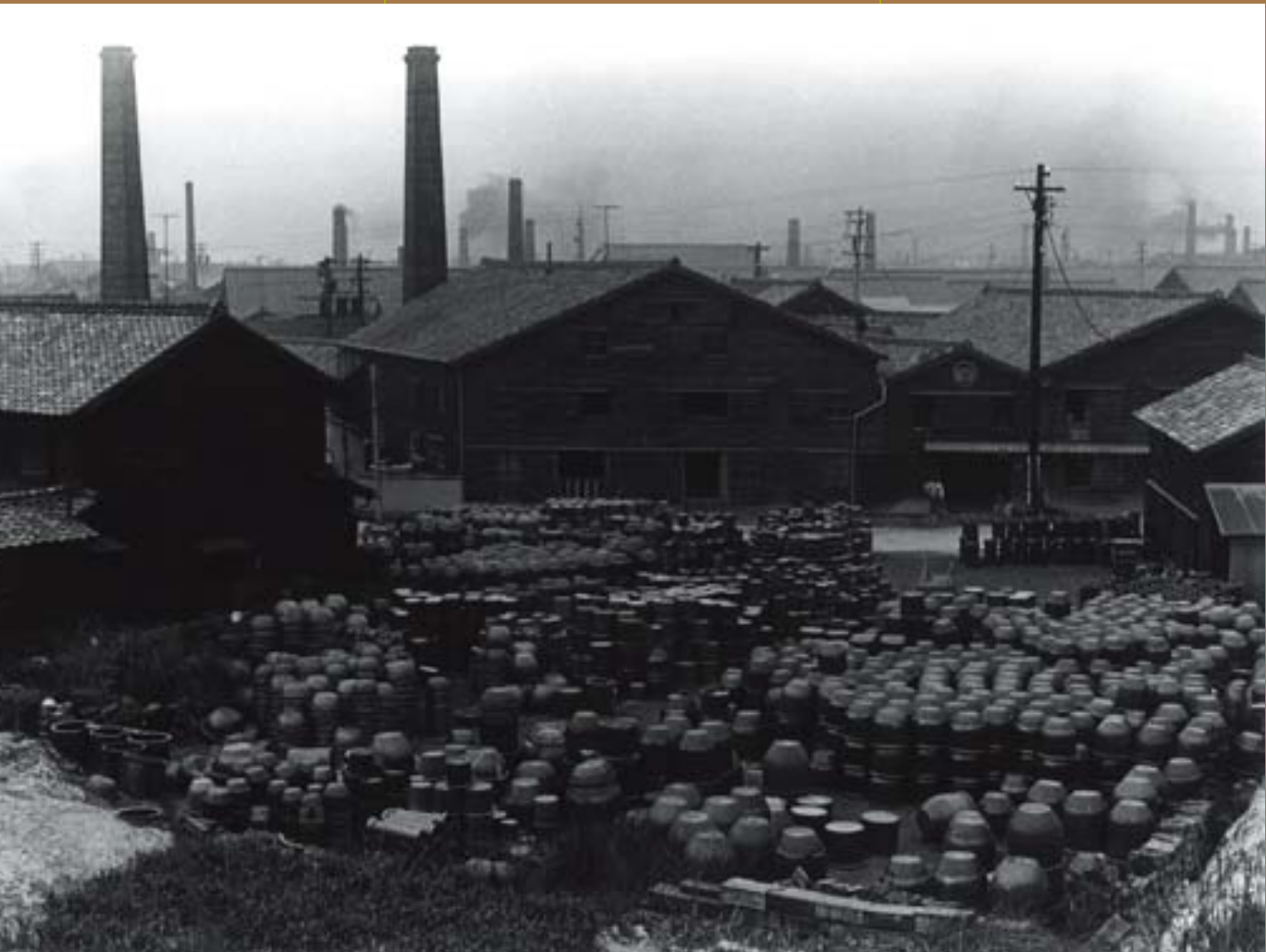
NEWS LETTER

特集

窯のある街

vol. 11 | 季刊 2009 春





▲昭和38～39年の常滑の街(撮影:山田脩二)



窯のある街

常滑に来たら、幹線道路から一歩なかに入ってほしい。そこには「小路」という強烈な個性を放つ道がある。かつて、土管が山積みになされた荷車や大八車の通った道。そして、街なかには、遥か昔から続くものづくりの歴史が刻み込まれている。最近、映画「20世紀少年」のロケ地になるなど、注目が集まっている常滑。何が人々を惹きつけるのか。常滑の窯を訪ねながら、その魅力を探ってみよう。



CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol. 11 季刊 春
2009

表紙写真

世界のタイル博物館は、展示室をつなぐロビーや廊下からも外の風景がよく見えます。2階正面にある花の形の透かしブロックを覗いてみたら、早春の柔らかな光のなかに、窯のある広場を楽しそうに歩いていく人たちがいました。

(2009.2.21)

表紙撮影：加藤弘一

[特集] 窯のある街

02 連房式登窯「陶栄窯」
窯のある広場・資料館 両面焚倒焰式角窯
連続焼成タイプのトンネル窯

06 常滑を歩こう!!

LIVE REPORT

07 開催報告
ゆらぎ モザイク考—粒子の日本美—
トーク 手技が生んだ、土とタイルの妙—歴史的な壁を再現して
久住有生×後藤泰男
ニューイヤーコンサート2009
カンタータの夕べ

LIVE SCHEDULE

08 これからの催し

常滑から*

10

散歩道にあった産業用トンネル



トンネル西側



トンネル東側

あまり知られていないようですが、常滑には先人たちがつくったトンネルがあります。

平安時代末期から常滑は、大型の甕や壺を主要な器種とする中世陶器の生産地でした。主に生活に用いられるやきものを量産し、海に面している地形的な利点を活かして日本中に品物を供給してきました。

常滑には今もなお、やきもの歴史に触れられる風情が多く残っているため、週末になると全国から来られる見物客でにぎわっています。

やきもの散歩道△コースには、常滑の近代史の一部を閉じ込めた産業用のトンネルが残っています。長さ約20mほどのこのトンネルは、丘陵の東側から海のある西側に製品や原料などを運ぶため、先人たちの知恵と力をつくられました。

今は閉ざされ、両側の出入り口だけが当時のことを想像させてくれます。今日も、大きな土管の壁の前で記念写真を撮る観光客に出会いました。みなさまも歴史をバックに、一枚の記念写真を撮ってみてはいかがでしょうか。

崔 宰燾 (陶栄工務工務長、デザイナー)

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

窯のある広場・資料館の両面
 焚倒焰式角窯は、大正10年築炉から昭和46年まで土管を焼いていた。この地方最大の間口5.5m、高さ3.4m、奥行11mのれんがづくり。「窯築さん」という窯づくり専門の職人に当時の技術で補修してもらった。そうした職人ももういない。

両側に7つつある焚き口から最初は30分間隔、終盤には15分間隔で石炭を投入する。焚き口から入ってきた炎は内側の火屏風から吹き上がり、アーチ型の天井にぶつかって床に下り、床下の煙道から21mの高さの煙突に吸い込まれていく。窯詰から窯出しまで15日が1サイクル。焼成時間は焼く物により70から90時間。窯内の温度は千度以上になる。炎の色具合を見ながら、石炭を投入し焚き続ける。なんとという重労働だったのだろう。



窯のある広場・資料館
 両面焚倒焰式角窯

窯の内側のれんがは、炎の跡を刻んでいる。石炭やれんがに含まれる鉄分と塩釉が溶けて鉛色に輝き、まるでオブジェのようだ。そのれんがの一つひとつに、市井の人々の営みが宿っている。



両面焚倒焰式角窯の窯入れ風景
 (撮影：山田脩二)

常滑の窯の次の転機は、窯の経営者たちが同業組合を結成した明治33年。最初の大事業として、ヨーロッパの最新技術をもとに「平地に築けて、石炭で焚く窯」の試験に着手し、34年に良い結果が得られたのだ。従来の日本の窯とは違い、高い煙突で窯の中に気流を生み出す「両面焚倒焰式角窯」。これによって、業者は個々に窯を持つことができるようになり、明治末から大正にかけて急速に普及していく。高い煙突から上がる黒煙は、ずっと、やきものの街・常

平地に築けて、
 石炭で焚く窯

その証拠が、現在も街なかに残るくねくねと曲がった細い道。「地形に合わせて有機的にできた江戸時代の道です」と、中野さん。高度経済成長期、モーターゼーションの時代がきてても、せいぜいオート三輪が入れるくらいのも道。主な輸送手段は荷車やリヤカーだった。土管や原料土を山積みにした大八車を人と馬や犬が引いていくのは、ごく普通の風景だったと聞く。

*）壺や壺などを高温で硬く焼き締める技術

陶 榮窯は全長22m、日本最大級の規模。当初は薪や松葉で焚いたが、明治38年に第1室だけ石炭を焚くように改良された。第1室で焚かれた炎は天井に上がってから床に下がり、第2室、第3室へと次々に吹き上がる。両端にいくにしたがって高くなっている10本の煙突は、通気力を利用して窯の隅々まで均一に焼けるように考えられた。



「登窯という江戸時代の施設で、土管など近代の資材を生産していたのです。傾斜地での作業は非常に効率が悪く、大きな物を大量に焼くために、大きな窯でなければならなかった。重労働で大変だったでしょう。何軒かの仲間が集まって一つの窯を操業していました」と話してくれたのは、常滑市民俗資料館学芸員の中野晴久さん。

「常滑は、江戸時代に成り立った街並みをそのまま転用して近代



連房式登窯
 「陶榮窯」

登窯で
 近代土管を焼く

常滑では、明治から近代土管、焼耐瓶、タイルの生産が始まった。急速にすすめられる近代化は都市整備に欠かせない土管を大量に求め、真焼*という技術を持つ常滑は街をあげての量産体制に入る。

真焼を効率よく生産する画期的な窯「連房式登窯」が常滑に登場したのは江戸末期だ。最盛期には60基ほどあったが、今残るのはやきもの散歩道にある「陶榮窯」だけ。20度の斜面に8つの焼成室が連なる。そこには、土と火と人が織りなした「闘い」ともいえる仕事の痕跡が今も鮮明に残っている。その迫力にただ圧倒されるばかり。陶榮窯は昭和49年まで操業していた。

連続焼成タイプのトンネル窯



I NAXライブミュージアムのもう一つの窯「トンネル窯」は、伝統的な手工業の延長だった常滑窯業とは違う、もう一つのやきものの歴史を語っている。

伊奈製陶(現INAX)は昭和初期から試験を繰り返し、同12年に半磁器タイル工場に長さ94mのトンネル窯を築いた。台車が入り口からレールの上を走り、約40時間後に出口から出てきたときには、均一のタイルが焼成されているというもの。大量生産への基礎を固めた技術だ。



時代のエネルギーともものづくりの迫力。それらは大きな磁場となり人々を引き寄せる。



昭和38~39年の常滑の街(撮影:山田脩二)



「常滑は、働く街」と言う人がいる。昭和30年代、常滑の中心部では400本もの煙突が黒煙を上げ、大量の物資が動いていた。街の人は材料や製品を運び、土を練り、成形し、焼いた。市内に残る窯や日常の街の風景は、そんな時代の大きなエネルギーともものづくりの迫力を今に伝える。それらは大きな磁場となって、人々を常滑の街に引き寄せているのかもしれない。

◆ 「常滑は、働く街」と言う人がいる。昭和30年代、常滑の中心部では400本もの煙突が黒煙を上げ、大量の物資が動いていた。街の人は材料や製品を運び、土を練り、成形し、焼いた。市内に残る窯や日常の街の風景は、そんな時代の大きなエネルギーともものづくりの迫力を今に伝える。それらは大きな磁場となって、人々を常滑の街に引き寄せているのかもしれない。

滑の繁栄のシンボルだった。しかし昭和40年代になると大気汚染が問題になる。43年に大気汚染防止法が施行されると、しだいに煙を出す煙突はなくなっていく。使われなくなった窯はどんどん風化する。とくに高い煙突は倒壊が心配されて取り壊され、常滑の風景も大きく変わった。

「NAXライブミュージアム」窯のある広場「資料館」は、姿を消しつつあるこの窯と煙突を修復して、昭和61年から一般公開したものだ。当時、その開設に奔走した平野篤夫さんは言う。

「NAX創業の地・常滑の貴重な財産をなんとか残して、市民に伝えていきたいという強い思いがありました。開館から10年間無料開放したのも、ここが市民の憩いの場になり、多くの人に窯とやきものの歴史を知ってもらいたかったからです」。

それは、「この地をやきものの文化ゾーンに」というミュージアム構想の第一歩でもあった。

INAXのこうした試みは、もてあましていた廃窯を見直す一つのきっかけになった。陶業窯は市が「責任をもって残す」と買い上げた。やきもの散歩道を産業遺産として活用しようという機運も高まった。他にも、個人で窯を修復・保存するのは大変なことなのだが、工夫を凝らし、さまざまな保存・活用の道を模索している人たちがいる。例えば「共栄窯」は平成5年、ギャラリー&陶芸工房として甦った。窯を残すという思いは多くの陶芸家の共感を得て、オープン時には大家から若手まで、地元作家が快く作品を提供したという。

常滑を歩こう!!

「やきもの散歩道のいちばんの魅力は、明治から昭和の産業遺産の中で今も人が生活している、街が活着していることです」と言うのは、ボランティアガイド「常滑案内人の会」会長の平野篤夫さん(4Pに登場)。南端の登窯からINAXライブミュージアムまでは約1km。名鉄常滑駅に着いたら、ミュージアムまで、街なかを歩いてみませんか？

9 出会い橋

川の両岸にもあたりまえのように古い焼酎瓶や土管が使われている。出会い橋からは、運がよければきれいな夕日が見える。



10 陶彫のある商店街。昭和の香りのする道がある。



11 東窯工業

今は砥石を生産する工場には、八角形の煙突や古い窯が残る。映画「20世紀少年」や「ゼロの焦点(2009年秋に公開予定)」のロケ地になった。(観光施設ではありません。)



12 INAXライブミュージアム

土とやきものが織りなす多様な世界を「観て、触れて、感じて、学び、創りだす—5つの発見館」。



1 やきもの散歩道

陶磁器会館を起点に、窯場を縫うように小路を巡るAコース(1.5km、約1時間)とBコース(4km、約2時間30分)が設定されている。

2 共栄窯

昭和47年まで土管を焼成していた。ギャラリーのほかに貸工房と陶芸教室を開催。両面焚倒焰式角窯はイベントホールとして貸し出している。(P5参照)



3 北山橋・いちき橋

常滑には下に川ではなく、道路が走っている橋が多い。丘の周囲をくろめいて材料や製品を運び、その上に橋を架けた名残り。

4 廻船問屋 瀧田家 デンデン坂

江戸時代から廻船業を営み、常滑のやきものを日本全国に運んだ瀧田家の屋敷(市指定文化財)とその前の坂。



5 土管坂

明治期の土管と昭和初期の焼酎瓶が土留めとして埋め込まれている。敷きつめてあるのはケサワ(土管の焼成時に使用した捨て輪)の廃材。(手づくり故郷賞大賞受賞)



6 光明寺からの眺め。高いところから常滑の街が見られる。



7 登窯 陶栄窯

重要有形民俗文化財指定(2P参照)



8 相寺院

延命地藏大菩薩がある。映画「20世紀少年」のロケ地にもなった。

